生きもの博物誌
【ニホンザル／日本】

サルに小馬鹿にされる日本人

伊澤 紘生
（いざわ こうせい）
帝京科学大学教授

サルとヒトとの共存

わたしたちの祖先、縄文人が渡来したおよそ二万年前、日本列島にはすでにニホンザルが広域に分布していた。狩猟を生業のひとつとする縄文人は、サルの肉を食用にし、頭や内臓や毛皮は薬用や衣料として利用していたと考えられる。そうしたつきあいのなかでアニミズム的一体感も醸成されていっただろう。また、化石からはサルが今より大柄であり、遺骨からは縄文人がわたしたちより小柄であったことからすれば、とくに交尾期の威風堂々たるオスザルは、子グマほどの大きさに映っていたに違いない。

その後三〇〇〇年ほどむかしから、弥生人が朝鮮半島経由で渡来し始める。彼らは定住する稲作農耕民である。森が切り払われ、開墾される。近隣の森は農用林、いわゆる里山へと変化していく。サルはそこでは農作物を荒らす害獣と認識されていたはずだ。一方で、人に近い動物であり、その賢さから、土着の信仰のなかにも組み込まれていった。

やがて縄文人と弥生人の混血化が進み、人口が急増し、稲作を中心とする日本国家の成立にいたる。それ以降、サルは害獣および狩猟動物として、里山を中心に日本人と攻防を繰り広げながら、両者は基本的には奥山と里とに棲みわけ、ともに生きてきた。

減少から回復へ、奥山から里へ

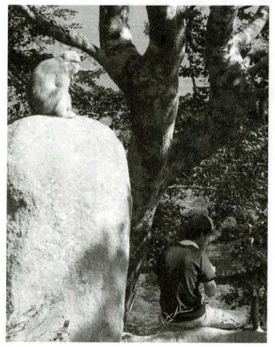
長く続いたこのような共存の状態は、近代に入って劇的に変化する。すなわち、明治中期以降戦前までは、銃器の発達や狩猟技術の向上によって、とくに積雪地域のサルは大量に撃たれ、東北から北陸地方にかけての多くの地域で絶滅していく。しかし戦後繰り広げられた国有林の大規模伐採と奥山の開発は、天然林を撹乱し、それまでより多様で多量の食物をサルに供給することになる。サルの数は回復する。同時に、伐採や開発に伴う縦横無尽の道路建設によって、サルの移動は驚くほど容易になった。

その後に、農業の機械化に続く里の過疎化や里山の消滅といった今日の時代が来る。里山という、人とサルの緩衝地帯（かんしょうちたい）はなくなり、里の防御力は著しく低下する。サルは奥山と里とを道路を伝って自由に往き来し始める。しかも、農作物は奥山の食物のように年変動がない。それによってサルの数は爆発的に増えた。

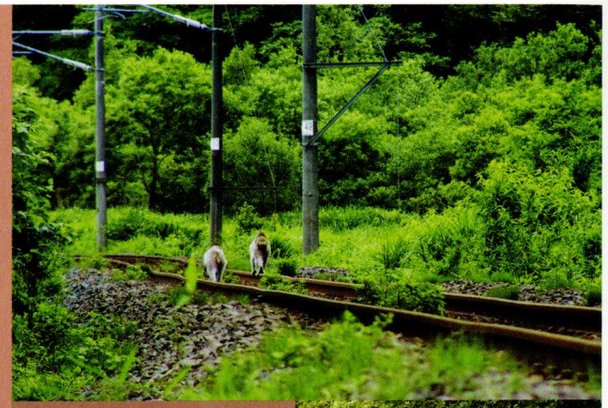
そして現在、もう奥山に戻ろうとするサルはどこにもいない。里に定着し、人を小馬鹿にし、さらに市街地への進出を強力に押し進めている。

食糧や薬用として、ときに神や神の使いとして、日本人の経済生活や精神生活のなかにしっかりと根付いていた「文化遺産・日本猿」像は、今や風前の灯である。同時に、戦後まもなく日本の知識界に華麗にデビューした「ニホンザル学」も、サルの圧倒的なパワーの前ではすっかり色褪せ、ほとんどなす術を失っている。

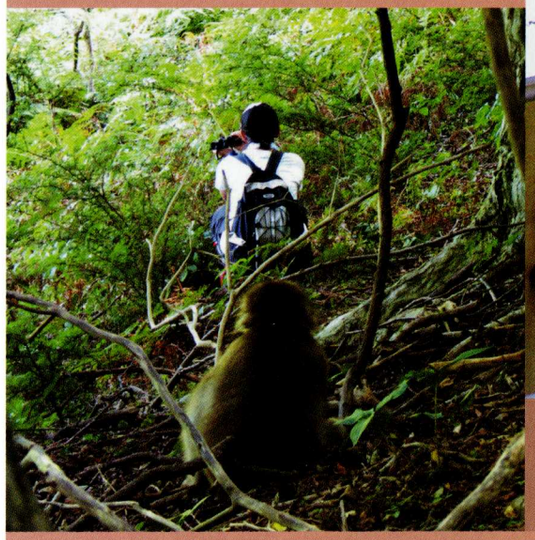
日本人は将来、ニホンザルをどう認識するようになるのだろうか。



サルの手鏡？



サルは行く、どこまでも。
道路を伝い、線路を伝って



ニホンザルの「ヒト学」？

ニホンザル（学名：*M acaca fuscata*）

オナガザル科。北海道と沖縄を除いて、北は青森県下北半島から南は鹿児島県屋久島まで、日本列島の広域におよそ20万頭が生息する。生息環境は、植生から見れば、より東の落葉樹林帯から西の照葉樹林帯、南の屋久島低地の亜熱帯要素が混ざる森林までを含み、それを反映して食物はじつに多様である。化石の証拠等からは、45万年ほどむかしに南方より朝鮮半島経由で渡来したと考えられている。